



Vol.13

発行 2014年8月
動物愛護ボランティア
《ねこの会》

事務局：TEL/FAX 0263-36-2192

ねこと松本... 恩返し

岡田 英二

松本に十数年暮らしたことを思い出す。

農林水産省に入省し、カイコを含めた昆虫の研究機関に配属になったことで、松本に異動した。当時、この研究機関は蚕糸・昆虫農業技術研究所松本支所という名称だった。それ以前は蚕糸試験場中部支場だったらしい。国の財政難から、独立行政法人農業生物資源研究所と変更され、支所から一研究室扱いに代わり、とうとう、五年前につくば移転となり、泣く泣く松本を離れた。

松本は本当によかった。つくば研究都市は、道路も広く、大型研究施設が建ち並び、最先端の研究が行われていて好印象だが、道端や歩道は草茫茫、いたる所、ゴミだらけ、犬の糞だらけで、イメージとは大違い。おまけに無駄に広くて、車という足がなくては生活しにくい。こうして離れて、初めて松本の良さが分かる。

最近、富岡製糸場を含めた施設が世界遺産になったことで、蚕糸業にスポットが当たった。私も世界遺産登録直前の支援イベントとである「シルクサミット2014 in 富岡製糸場」の実行委員会事務局スタッフとして参加した。松本でもイオンモール改装騒ぎで、片倉所有のカフラスの建物が希少だと騒がれている。松本には、私の所属する研究所以外にもカイコの育種をしていた片倉工業の普及団や生物研究所があり、岡田には県の蚕業センターがあった。現在、高原社と言う蚕種業者が頑張っているだけだ。今になって蚕糸業が偉大だと言って関心を示しているが、少し遅かった様に思える。当時の松本研究所では地域住民の要請に応じて内部の見学に、業務紹介の機会を設けた一般公開をし、中学生の職場体験の受け入れ、小中学校教員向けサマーセミナーなども引き受け、カイコ育種や養蚕などの最先端技術を発信していた。

明治・大正・昭和・平成にかけて、この四ッ谷の地に100年間続いた蚕糸業の発展に無くてはならない試験場／研究所や広大な桑園があった。白いカイコが桑を食んで大きく育ち、綺麗な糸を吐いて白い繭を造り、その繭を繰って貴重な生糸を引き、信州から世界へと養蚕・製糸業を発展させた。その過程を20年くらい前から長野県では省みられず、ここ松本は、貴重な遺産を失ってしまったように感じる。岡谷にはこの8月1日から岡谷蚕糸博物館がリニューアルして開館した。私の所属する研究所の製糸試験場があった施設を上手に生かして復活した。古い物を大切にしながら、新しい物を創造することが大事な事なのではないだろうか？古き良き物を簡単に捨てていなければ、私もまだ、松本に居られたのではないかと、そんな気がする。

その蚕糸・昆虫農業技術研究所の時代に、松本で「ねこの会」を立ち上げた仲間に誘われて地域猫活動のボランティアに参加した。猫を飼ったことが無かった私は、白茶ブチの雌猫と巡り会い「ハナ」と名付けて初めて飼い主になった。16年前のある日、朝の公園で、犬に追われ、私を頼りに助けを求めて肩へよじ登ってきたのが縁だった。怯えた猫は自転車の籠のエコバックに潜り込んだまま、お昼まで籠の中で僕を待っていた。ノミだらけの捨て猫に遭遇し、慣れない飼育に悪戦苦闘していた時に、手助けしてくれたのが山田さんだった。ほんとに可愛い猫に関われて幸せだった。猫がこんなにも可愛くて賢く優秀な動物だと知ることができたのは「ハナ」のおかげだ。そんな「ハナ」も今はもういない。だからこそ、ここ松本を素晴らしい所であり思い出深いところだと、想いやるのだろう。

遠いつくばの地から「ねこの会」の運営に携わるのは、大事なことに気付く切っ掛けを与えてくれた松本の地から発信したいという「猫に恩返し」の想いがあるからだ。